

貯金尽き 車上生活

ある高齢男性の3ヵ月

車中で分厚い毛布を2枚重ねても、12月の朝は体の芯まで冷えた。持病で呼吸がつかなくなった。貯金が尽き、車上生活だった県内の高齢男性は「このまま死んでしまうかもしれない」と覚悟した。窓越しに電信柱の病院広告が目に入り、すうに連絡した。病院のベッドで男性は「特段ぜいたくをしをしたわけでないのに、なぜこんな境遇になってしまったのか。消費税をもっと上げてでも、年金だけで暮らせる社会にしてほしかった」と静かに語った。（堀英彦）

凍える朝 毛布2枚 頭が痛い



車上生活で使っていた2枚の毛布。男性は「それでも寒くて凍えた」と振り返る。2019年12月、県内

トラブル起こさぬよう

心掛けた。時速40キロ以上は出さなかった。

■駐車場を転々■

夜は、バチンコ店やスーパー、コンビニの駐車場など、日ごと転々とした。同じ場所だと通報されたり、警察に職務質問をされたりする恐れがあった。全国的には、トイレがある道の駅での車上生活、車中泊が問題となっており、禁止しているところもある。24時間営業のファストフード

ブスルーで買った安いカツ丼などを食べた。お金が足りない時は、子どもに連絡したが、拒否されることもあった。借金して大学までやったのに……。時々、知人宅に泊まらせてもらった。

■電信柱の広告■

冬場になり、朝は毛布をかぶっても震え、頭が痛くなった。呼吸がつかなくなり、車から降りてコンビニにも行けなくなった。死を意識した。

たまたま、電信柱に張り付けてあった病院広告が目にとまり連絡した。「金曜に年金が入るので、その時に診てくれませんか」と話すと「すぐ来なさい」と言われた。低年金の高齢者ら生活が苦しい人の医療費を減免する「無料・低額診療制度」を利用し入院。病院を通して生活保護を申請した。

車の中には、お茶や炭酸飲料のペットボトルが転がり、ハンガーにはワイシャツが1枚掛けられていた。男性はこれからアパートを探して暮らすつもりだ。県内の病院には、この男性の

ようにエコノミークラス症候群の症状を訴え、病院に駆けつけてくる車上生活者もいるという。

「このまま——」覚悟

■年金4万だけ■

仕事の借金もあり、妻とのけんかが絶えず、20年ほど前に家を出た。「すぐに戻るだろう」という甘い考えがあったのかもしれない。

宿泊できる県内の温浴施設が家代わりになった。1ヵ月数万円かかる利用料も家賃と思えば高くなかった。「いつでも風呂に入れるし、掃除もしなくていいから楽だった」。定宿にして

いる客は10人ほどいた。

持病の悪化で2018年10月、仕事を辞めた。借金は返済したが、貯金もなかった。月4万円ほどの年金だけが頼りだった。19年9月から、本格的な車上生活になった。厚手の毛布を2枚買った。

日中は大きな施設駐車場に止め、車内でテレビを見ながら過ごした。車の任意保険には入っておらず、とにかく安全運転を

店が近い駐車場には、車上生活と思われる車が何台もあった。夜になるとやって来て、朝になると散っていく。飲み物1杯で、何時間も中にいられるからだ。だが男性は、夜中に店に入ったことはない。「コーヒー1杯で一つの椅子を独占するのは、お店に悪いから」

食費は1日千円までと決めていた。コンビニで朝昼兼用のパンと飲み物を買ひ、夜はドライ